



農縁活動による 異文化交流の コミュニティづくり

「コロボウシとカボチャの物語」
実行委員会

札幌から車で2時間あまりのところに位置するニセコは全国的に知られたスキーのメッカですが、近年は国際リゾートとしても脚光を浴び、大きく変わりつつあります。

そうした変化のなかで、ニセコがホスピタリティの高い国際リゾートとなるためには、地元住民と外国からの移住者・滞在者との相互理解、異文化交流が大切だと考えた人たちが、2008年2月、「コロボウシとカボチャの物語」実行委員会を起ち上げました。

最初の事業となる「プログラム2008」では、新たにニセコに移住した外国人とカボチャを育てる農縁活動を3月から開始、収穫期となる秋の10月25日には、大地の恵みに感謝して子供たちがコロボウシにふんして町を練り歩く「コロボウシとカボチャの物語」ニセコ国際ナショナル子供仮装行列（ニセコ・ハロウィーン・パーティ）を実施しました。

代表の岩崎とし子さんらに起ち上げの経緯、活動状況や成果、今後の抱負などについてお聞きしました。

「コロボウシとカボチャの物語」との出会い



岩崎さんは、ニセコ町の里見地域で“カボチャママ”の愛称で知られる「岩崎ファーム」の経営者です。1999年12月、里見地域に農産物の直売ブースを備えたコミュニティセンターが完

成し、翌年8月には直売を開始しますが、お客さんが来ません。コミュニティセンターに合わせて発足した里見振興会の事務局をしていた岩崎さんは、センターのPRのためにホームページを作りますが、それが縁で札幌から移住し里見地域に「しろくまカフェ」を開いている梅本京子さんと知り合います。

その梅本さんから2007年の春に、「ニセコで食事をしたら野菜がとてもおいしい。ぜひ農家を紹介してほしいという人がいる」という話があったといいます。ところが、「その年の7月に主人が突然他界、何をやる気力もなくなるという状態でしたが、周りの人たちの励ましで、なんとか秋の取り入れも終わりました。来年もカボチャだけは作りなさいと励ましてくれましたが、生返事だったようです。そのころ、梅本さんから紹介された方々が訪ねてきました」。やがて、12月25日のクリスマスに1通のメールが届きます。それが「コロボウシとカボチャの物語」という企画書でした。企画内容は、ニセコの自然の中で少年と魔物が戦う話です。少年に秘密を知られた魔物は、玉の中から出てきたコロボウシ^{*}たちに「少年をカボチャにしまえ」といい、村を襲います。しかし、お父さんに「コロボウシは、強い信念を持った人のいうことを聞くのだよ」と聞いていた少年は友だちと一緒に、コロボウシとも力を合わせ、逆に魔物を大きなカボチャにしまいます。それ以来、ニセコには不思議なことにおいしいカボチャが実るようになり、年に1度、実ったカボチャでお祭りを開くようになったという物語です。

岩崎さんは、「以前よく主人と話をしていたような、直売所やネットを通じて、いろいろな人たちに畑に来てもらい、トマトや野菜、ハロウィーンのカボチャと一緒に収穫してもらい、おいしいね、楽しいねといってもらえる農家にしたいとの思いが、この物語には詰まっていた」といいます。

いろいろな人との出会いが元気をつくる！

ご主人を亡くされて気落ちした“カボチャママ”岩崎さんに「コロボウシとカボチャの物語」をプレゼントしたのは山田泰司さんです。東京の建設コンサルタント会社に勤務しながら、全国の地域づくりに関わり、時折、ニセコも訪れています。

「2007年に仕事で一緒にニセコを訪れた際、一

^{*} コロボウシ：まったくの造語。コロとした(かわいい)法師(ほうし)を組み合わせた。不思議な力で人の願いを叶えてくれる。アイヌの伝説に出てくるコロボックル(ふきの葉の下の人)ではない。

緒にビジネスで来た波佐本由香さんがニセコを大好きになりました。そして梅本さんの紹介で岩崎ファームへお邪魔する機会がありました。また、彼女が仲良くなったホテル甘露の森の当時支配人だった松橋京子さんに紹介されて、(株)アンヌプリ・ヴィレッジ取締役のベック千種さんと知り合いました。岩崎さんの姿には、日本の農家さんの問題が凝縮されていて、『せめてカボチャでもやっていけたら』という言葉がすごく印象に残りました。また一方、外国人がたくさん来ているニセコで、外国人と日本人のコミュニケーションが不足していて、お互いの不信感がニセコ地域の発展に影響することが気になっていました。ニセコはすごくポテンシャルが高いところで、それをなえさせてはいけません。自分ができることは何かと考えたとき、きっといろんな人たちとの出会いが岩崎さんの元気につながると思ったのが企画のきっかけです」と山田さん。



甲府で歯科医をしていた山田さんのお祖父さんは、戦後の荒廃した状況のなかで子供たちに創作物語を話す語り部で、山田さんはそれを1冊の本にまとめていました。その中にコロボウシの物語のモチーフがあったといいます。そこで、活動のメッセージをみんなに伝えるときに、このモチーフをニセコに置き換えて展開させ、企画書とセットにしたそうです。

コミュニケーションの壁を乗り越えるツール

物語との出会いはうまくかみ合いましたが、「やりたいなら、協力するよ」といって、実行委員会でも農業技術指導を担当することになる(有)川原種苗の川原与文さんがいなければ農縁活動は動かなかったといいます。

「ニセコ町や倶知安町ヒラフエリアは外国からも注目される有数のリゾートエリアですが、地元住民と外国人との接点が薄く、会話をする雰囲気がない。やってくるお客さんは地元のお持てなし



の面に疑問を感じています。シンポジウムやコンサートなどを企画してもなかなか意識が変わりません。接点をつくる場面としては、英語圏では第1番目にクリスマス、次いでバレ



畑に立てる看板の製作

ンタインデーがポピュラーな催しです。ハロウィーンも5本の指に入ると思いますが、山田さんのカボチャをモチーフにしてニセコを盛り上げる企画はすばらしいと思いました。異なる文化の人が付近に住んでいても知り合いになれない方が大勢います。イベントをすると集まってはくれますが、日本語を話せない外国人とはうまくコミュニケーションできない。一部のホテルやレストラン、アウトドア関係者だけでなく、私たちのような地元の人間にも海外からのお客さんを受け入れる心構えを持った人はたくさんいるはずですから、その壁を乗り越えるきっかけになると思いました。ビジネスの利益をどう出すか血まなこになるタイプの企画もありますが、春先に除雪をして、ビニールハウスを建て、カボチャの種をまき、移植する、収穫するという一連の作業で訪れるお客さんと一緒に汗を流すことで、難しい会話がなくてもコミュニケーションが成立し、親近感が醸し出されます。そうした交流のしめくくりには、外国の方が企画する本場のハロウィーンを組み込んでいるのです」と川原さん。

多くの出会いがすてきに感じられる

実行委員会には「外人部隊担当」という変わった役割の人がいます。しかし、これは別にそうした組織があるわけではなく、外国人ファミリーの相談窓口、ハロウィーン・パーティーの責任者ということで、前述のベック千種さんがその人です。



「私も主人も学生時代を米国のコロラド州で過ごし、主人はアラスカなど世界中で滑っていますが、特にニセコのパウダースノーが大好きで2000年ごろから毎年来ていました。しかし、ホテルに

は大きいベッドがなく、足が出てよく眠れません。ニセコで滑っては札幌へ、また札幌からニセコに来て滑り、千歳空港から帰るということが6年ぐらいいつきました。これでは大変だと思い、'06年にニセコに自分たちの別荘を建てました。そのうち、ヒラフへも外国人が大勢来るようになり、別荘を建ててニセコライフをしたいという人が増えてきたので、これを事業にしようと、勤めていた証券会社を辞め、'07年7月に引っ越してきました。自然と遊ぶのが大好きでここがドリームハウスになったのです。家ができるまでホテル甘露の森に泊まり、こんなことをしたい、あんなことをしたいと話していたのを聞いて、当時の支配人松橋さんが山田さんを紹介してくれて、さらに岩崎さんたちへのつながりができました」。

「日本でもハロウィーンのお祭りは多いですが、外国人と地域の人と一緒に催しは少ないと思います。また今回、声をかけてみて分かりましたが、南半球のオーストラリア人はハロウィーンをよく知らないようです。今年1年の活動を通して、カボチャをほしい人がたくさんいることが分かりました。イベントではもっと早くたくさんの人に声をかけるべきだと思いました。来年は場所もキチンと確保して、農縁活動を通じて農家の方と一緒に10月の観光のデッドシーズンを盛り上げていきたい。これからの目標はたくさんありますが、達成されることは多いと思います」とベックさん。

こうした活動を通じて、多くの出会いがあり、同じニセコに暮らしていても、それまでまったく縁のなかった人たちがつながることが、ベックさんにはとてもすてきに感じられたようです。ハロウィーン・パーティーには、当初予想した30人を遙かに超え、外国人20人を合わせ、150人もの人々が参加し、準備したキャンディが不足して困ったようです。しか



ハロウィーンに出発だ！

し、初めて参加した方々からは、来年はぜひ雪解けの作業から参加したいとの声がたくさんあり、今後の活動継続への意欲は大きくなったといえます。

一人一人のつながりの不思議さ

農縁活動の締めくくりのハロウィーン・パーティー。投げた石の波紋が広がって本人たちも気がつかないリアクションが生まれ、世代も2歳児からご高齢の方まで、外国の何カ国かの方も参加し、言葉が通じなくてもコミュニケーションができ、みんな笑顔で帰ってくれたそうです。

しかし、「企画を行動に移すとき、かけ声を発する人と、それを事務的に処理する人がいると助かる。農家は農地にカボチャの苗を植えることは全然苦にならないが、人を呼んだり、連絡を取ったりすることには慣れてないので大変なのです」と川原さん。

「この企画を通していろんな方が私に元気をくれました。大人も子供もみんないい顔をして、楽しかったねといってくれます。カボチャを通して地域の人たちともっともっと人のつながりを広げていきたい。自分たちが楽しむ農業をしないと、若い人たちも後に続いてこないと思います。みんなが畑で楽しく元気になって帰ってくればすてきだと思います。“コロボウシとカボチャの物語”は、金もうけではなく、人もうけの話だと思っています」と岩崎さん。

*

ニセコの豊かな自然の中で、ひとつの活動がさまざまな新しい出会いをつくり、人と人の輪を広げつつある。生活と生産の場から生まれた、こうした地域の活動が、ニセコの新しい国際交流の時代を開くベースになってほしいと切に思う。

「カボチャママ」ホームページ

<http://kabotyamama-hp.hpinfoseek.co.jp>

